

聞こえない人と呼ぶことは何が悪いのか

What's wrong with the calling name "hearing-impaired"?

伊藤 泰子[†],
Yasuko ITO

Abstract Hearing people set a hearing(=inputting) standard. The calling name, "hearing-impaired" shows minus (=disadvantage) from a hearing standard. Approaching to the standard means "unity(=to live under the same roof, or to live in the same house).The calling name, "hearing-impaired" give minus image and inferiority to the deaf. While the Deaf with sign language has no hearing standard and sign language for the Deaf means "unification (=to live under several different roofs, or to live in a row house).Sign language is the fundamental communication tool to survive for the Deaf. The Deaf with sign language can live as a proud linguistic minority.

1. はじめに

本論では「聞こえない人」「聞こえない子」「聴覚障害者(聴覚障害児)」などの呼び名は何か問題はないだろうか、適正な良い呼び名であるかどうかを検証した。これらの呼び名は一般的に通常、多く使われているが、その呼び名で呼ばれている本人にとってはどうだろうかと当たり前に使われている呼び名に筆者は疑問を抱いた。

そして検証の結果、2つの問題があると気づいた。すなわち、2つの誤った見方や考え方があった。1つは、これらの呼び名は聞こえない人とその他の聞こえる人との対等な人間関係を示す呼び名であると疑いもなく思われていたという誤りであった。もう一つは、人間のコミュニケーション手段は音声言語のみという考え方が誤っているということであった。

具体的には「聞こえない人」と呼んで、聞こえない人と聞こえる人の間に上下の人間関係を生み出して、聞こえない人に劣等感を与えていた点が良くなかった。人間を含む生き物のコミュニケーションを考えると、それぞれの生き物には利用可能なコミュニケーション手段が音声言語以外にもあることに気づく。

すると、音声言語を使わない聞こえない人には手話が利用可能なコミュニケーション手段であることになる。その結果、聞こえない人が利用可能なコミュニケーション手段である手話を当たり前に使える、たとえば「手話者」という呼び名で呼ぶようにすることによって、対等な人間関係が生まれるとわかった。

2. 何を呼び名は伝えるか

2・1 呼び名とは？ 見られる状態

一般的な呼び名はどのように名付けられるのかを考えてみると、呼び名は多数派、あるいは相手から「見られる状態」に対してつけられる。そして、想像される状態、あるいは事実を表す呼び名がつけられる。たとえば、あだ名、ニックネーム、聴覚障害者、聞こえない人、白人、黒人など、見られる状態から名付けられる。

しかし、時には将来的に望まれる姿を想像してつけられる呼び名もある。たとえば、子どもの名前、企業名も将来どのようなようになってもらいたいかという思いを含む。

また、自らを或る呼び名で呼ばれることで、自分の主張を示そうとするものもある。たとえば、アメリカやカナダのろう者は **deaf** を大文字の D にして **Deaf** と呼ばれること、呼ぶことによって彼らは「手話を使う人である」ことを主張した。このように多くの呼び名は見られる状態を呼び名にしていると考えられる。

[†] 愛知工業大学 基礎教育センター 非常勤講師

2・2 呼び名をつける理由

では、なぜ呼び名はつけられるのか。呼び名はABCなどと、物事や人を区分、区別して差別化するためにつけられる。それぞれ異なるものをその違いを呼び名で示す。あるいは、同じようであるが、少しずつ異なるものの違いを呼び名で示す。

その「違い」には縦の違いと横の違いがあると筆者は考える。それぞれ、ABCDと異なるものの違いを呼び名で示す「横の区分」と、 $A_1A_2A_3$ と同じようであるが少しずつ異なるものの違いを呼び名で示す「縦の区分」があると考えられる。

「聞こえない人」と呼んで、何を差別化しようとするのか。あるいはなぜ呼び名によって差別化しようとするのか。呼び名「聞こえない人」の裏には「聞こえる人」が存在する。聞こえないことが差別化されることは、聞こえないことに焦点を当てて、さらには聞こえることと比較している。つまり、聞くことを重要視して、聞こえないことが良くない重要な問題であると言っているようなものかと考えられる。

2・3 コミュニケーション4技能における

active な / passive な呼び名

たとえば、難聴児、聴覚障害児、耳が不自由な子ども、聞こえない子どもなどの日本語の呼び名に対応する英語の呼び名をあげると、deaf children, hard-of-hearing children, hearing-impaired children などがある。では、コミュニケーションの4技能のうち、どれをコミュニケーション手段とするかで、子どもの呼び名をつけてみる。

passive, receptive, input	active, productive, output
deaf children, hearing-impaired children (聞こえない子) hearing children (聞こえる子)	speaking children
reading children sign reading children lip reading children	writing children signing children

これらの呼び名の中で一般的に使われているものは hearing children, deaf children, hearing-impaired children のみである。4技能のうち、hear に注目して、見られる状態に名前を付けられている。なぜだろうか。

それは、聞くことは数値化して、基準値があり、聞こえないことはマイナスを示すことができるからではないだろうか。聞くとは誰にでも音(音声)を聞くことであって、デシベルという単位で数値化する。そして、標準(0デシベル、正常な聴力を持っている成人が聞き取るこ

とのできる最も小さな音の平均)がある。聞こえない子は hearing children という呼び名に対してマイナスのイメージを持つ名前 hearing-impaired が与えられる。数値化できる呼び名は、はっきりと子どもを区別できることになる。数値化が聞く能力のマイナスを示す。これによって、人間関係がプラス/マイナス(標準とマイナス)の上下関係となる。

2・4 社会が心配すべきことは人間関係

見られる状態や想像される状態を呼び名とされた「聞こえない人」や「聞こえない子」という呼び名は、さらにはマイナスのイメージを加えられる。その呼び名でAさんがBさんと呼び、そしてBさんはAさんに呼ばれることによって、両者の人間関係が対等な関係ではなくなる。両者の関係が良い関係ではなくなる。この関係は差別、偏見、劣等感などにつながるのではないかと。そうなると、社会全体の良い人間関係が形成されなくなる。社会が心配すべきことは、良い人間関係を築くことができないことだろう。

では、数値化できないその他の呼び名を使うようにするとどうなるか。それぞれの子どもの違いは1つの基準がないので「差」ではなく「異」になる。縦並びの関係から横並びの関係になる。それは自分と相手は同じ人間と考える見方から、自分と相手は異なる人間という見方になることを意味する。誰もが異なることを認めることになる。それは、対等な人間関係を築くことになるのではないかと。

3. 呼び名の移り変わり

英語の聞こえない人を示す呼び名は歴史的に移り変わっていった。日本語においても今では差別語とも言われる「つんぼ」や「聴覚障害者」「聞こえない人」「耳の不自由な人」など、さらには現在では「人工内耳装用者」という呼び名もある。

3・1 聞こえない人の呼び名の移り変わり

それでは、歴史的な聞こえない人の英語の呼び名を見ていく。

3・1・1 deaf

Oxford English Dictionaryによれば deaf の最初の主要な意味は「聴覚が欠けている、すなわち聴覚に欠陥がある」(1.a. Lacking, or defective in the sense of hearing)とあり、例文は825年以後のものが記載されている。また、the deaf という単語では (b. *the deaf*, deaf people) 1000年以後の

例文が載せられている。

1611年の聖書の例文をとりあげる。(1611 Bible Isa. xxxv. 5 Then.. the eares of the deafe shallbe vnstopped.) 旧約聖書イザヤ書に書かれている。The eyes of the blind shall be opened, and the ears of the deaf unstopped(35.5)で deaf が使われている。つまり聴覚障害者と見なしていたことになる。

3・1・2 deaf and dumb

次に deaf and dumb という言葉は 1225 年からの例文がある。1865 年に Edward Burnett Tylor(1832-1910)¹⁾が論文で deaf-and-dumb を使っている。

また、deaf and dumb が「頭が鈍い」「馬鹿な」「愚かな」などの意味も持つ例文も 1440 年から記載されている。これらの意味も、音声言語を聞くことができないから脳の発達が十分ではないと見なすことから生まれる意味であると考えられる。

deaf and dumb は学校名にも多く使われていた。

1817 年、最初のアメリカで創設された公立のろう学校は Connecticut Asylum for the Education and Instruction of the Deaf and Dumb Persons(1817-1819)であった。その後、American Asylum for the Education and Instruction of the Deaf and Dumb に、1897 年以降は American School for the Deaf に学校名は変更された。1818 年、ニューヨークに私立の聾学校 New York Institution for the Instruction of the Deaf and Dumb が創設された。1820 年にフィラデルフィアに私立のろう学校 Pennsylvania Institution for the Deaf and Dumb が、1823 年に Danville に Kentucky Asylum for the Tuition of the Deaf and Dumb が、1829 年にオハイオ州コロンバスに州立のろう学校 Ohio Asylum for the Education of the Deaf and Dumb が創設された。

1857 年 Columbia Institution for the Instruction of the Deaf and Dumb and the Blind が州立学校として Washington, D.C. に開校した。その後、1864 年、Columbia Institution for the Instruction of the Deaf and Dumb and the Blind を分割して Edward Miner Gallaudet を学長とする National Deaf-Mute College が誕生した。

3・1・3 deaf-mute

OED の deaf-mute の例文に以下の 1837 年の例文がある。

1837 *Penny Cycl.* VIII.322/2 s.v. Deaf and Dumb, In all these conditions of deafness, the person is consequently mute, or dumb. Hence the expression Deaf-Mute, as used in the continental languages, and Deaf and Dumb, as used in England and America. (下線は筆者による)

deaf and dumb と同じ意味として deaf-mute という単語が 1837 年の例文を初めとして OED に記載されている。ところで、この 1837 年の Penny Cyclopaedia(=The Penny Cyclopaedia of the Society for the Diffusion of Useful Knowledge)では deaf and dumb はイギリスやアメリカで使われている単語で Deaf-Mute はヨーロッパ大陸の言語で使われている単語であると記載されている。たしかに mute はフランス語から発生した単語であるために、アメリカで聾学校の表示はその後、deaf-mute に変わった。そのほかに、1849 年にノースカロライナ聾学校で発行され始めた学校新聞の名前が *The Deaf Mute* であった。また、ろう者たちのクラブ Deaf-Mutes' Union League of New York が 1886 年に設立された。

3・1・4 Deaf

1972 年アメリカの Deaf Studies の学者 James Woodward が Deaf と deaf を区別して定義した。聴覚障害者 deaf に対して Deaf とは手話をコミュニケーション手段とする言語的少数派の「ろう者」を示す呼び名とした。その後、大文字の Deaf を使う表現がアメリカやカナダで広まった。²⁾日本では、聞こえない人たちは deaf を「聾者」と、Deaf を「ろう者」と表記して区別しようとする人たちがいる。

3・1・5 silent worker, people of the eye, cyborg

アメリカで 1888-1929 年まで New Jersey School for the Deaf で、ろう者コミュニティのために発行された新聞名が Silent Worker という呼び名があった。ろう者自身に命名した言葉であろう。

また、Harlan Lane が National Association of the Deaf の会長 George Veditz の言葉から本のタイトルにした呼び名が the people of the eye³⁾である。同様にニュージーランドのろう者団体が People of the eye⁴⁾というタイトルでさまざまなろう者たちの物語を 1 冊の本にまとめている。

最近では、人工内耳装用者になった Michael Chorost⁵⁾が自分自身を「サイボーグ(cyborg)」と本の中で呼んでいる。

以上の呼び名の移り変わりをまとめると以下の流れになる。そしてその呼び名は 2 種類に分けられると筆者は考える。

①の呼び名 ②の呼び名

①deaf (825 年から) → ①deaf and dumb (1225 年から) → ①deaf-mute (1837 年から) → ②silent worker (1888-1929 年まで発行された新聞名) → ②Deaf (1972 年から) → ②the people of the eye(2001 年、2011 年) → ①cyborg(2005 年)

3・2 2種類の呼び名：縦方向の違いを示す呼び名と横方向の違いを示す呼び名

聞こえない人に対する呼び名は英語では移り変わりが見られる。文学作品・新聞などの文章の中に、あるいは学校名などに見られる。

ジーニアス英和大辞典による deaf の語源は「ぼんやりした」という意味を表していた。その後、この呼び名は移り変わっていった。上記の呼び名の移り変わりは2パターンに分けられると筆者は考える。

- ①聞こえる人側が名付けた呼び名、聴力という「能力」を数値化して standard (基準) がある縦方向の違いを示す呼び名 (vertical name と名づける)
- ②聞こえない人側が名付けた呼び名、数値化できないので基準がない横方向の違いを示す呼び名 (horizontal name と名づける)

この2つのパターンの呼び名は2種類の共生社会をめざすだろう。

- ①unity 1つの基準で統一する、縦社会の共生社会、人間は皆、同じという前提で何人かが1つのグループに統一される。Aという統一グループとなる。色で例えると1色 (A色) になる。
- ②unification 異なる二つ以上のものをまとめ合わせて1つにする、横社会の共生社会、人間はさまざまに異なるという前提で何人かが1つのグループにまとめられる。それぞれ、A, B, Cなどという異なる人がDという統合グループとなる。色で例えるとミックスした色 (D色) になる。

図で表すと、次のように考えられるだろう。

① A group

	A ₅
	A ₄
	A ₃
	A ₂
	A ₁

② D group

A	B	C	C	A	B	C
---	---	---	---	---	---	---

3・3 縦の呼び名 (vertical names) と横の呼び名 (horizontal names) の影響

日本語で「聞こえない人」という呼び名も上記の①に相当する vertical name であると考えられる。vertical name に相当する呼び名が使われる状況では、1つの基準で判断されて、standard (たとえば数値の0) 以下の人はマイ

ナスとなり、基準に近づける努力を必要とされる。自分がマイナスの人間だという劣等感を持たされる。自分はマイナスの人間だから、基準以上の人に助けられる受け身的人間になる。

数値の0という基準は「聞こえない人」という呼び名に時間的軸の上でも過去から今まで聞こえない人、今後の未来も聞こえない人という、永続性を示し、劣等感を聞こえない人本人に与えるが、少しでも数値が聞こえる人に近づくのではないかという将来への期待を与えるのではないか。

このような感情をもつ助けられる受け身的な人たちと助ける人たちで構成される支援社会では、受け身的な助けられる人たちとの対等な人間関係が持てないと筆者は考える。

では、horizontal name では、「signer (手話を使う人、手話者)」「the people of the eye(目でコミュニケーションする人)」などは、数字では表せないし、その場その場で呼び名が変わる可能性もある。目の前にその人がいるというライブコミュニケーションの状況と限られることになる。聞こえない人本人も、聞こえる人とは異なるコミュニケーション方法の手話を使っていると思うだけではないだろうか。そう思うならば、聞こえる人に対して聞こえないと劣等感を感じることもないだろう。

たとえば、ペンギンは鳥類だが飛べない。しかし、飛べないとわかっていないと、ペンギンには羽らしきものもあるから、頑張って練習すれば飛べるようになるのではないかと思う。このように考えると同様に、聞こえない人も耳がある、それなら、努力すれば聞こえるようになるのではないかと思う。そして、聞こえない人に聞く訓練を与えて努力を強いる。これが差の考え方である。これをペンギンは飛ばない他の鳥とは異なる鳥だと、異の考え方をすれば、ペンギンにも聞こえない人にも無駄な努力を強いることにはならないはずだと筆者は考える。

4. なぜ、vertical names が使われてきたか

vertical names は上下関係を示す呼び名で、「聞こえない人」と呼ぶことで聞こえない人に劣等感を与える対等な関係を生まない呼び名だった。この点に多くの人が、社会が気づいていなかった。なぜ、vertical names が使われて続けてきたのか。

4・1 コミュニケーション手段は音声言語だけではない。生きるためのコミュニケーション

コミュニケーションについて、下記のことは私たちが当たり前、常識と思いがちなことである。

- ・子どもは音声習得して文字を習得する。
- ・人間は言葉を話す動物。自然に言葉を聞き覚えて習得する。
- ・臨界期までに母語を習得しなければその後の言語の習得はむずかしい。
- ・手話は身振り手振りで、手話は音声言語と同等の言語とは言い難い。

このように音声言語のみが重要なコミュニケーション手段と考えられていると言える。音声言語を聞いて音声言語を話すことがコミュニケーションと考えられ、「聞こえない子」は音声言語を聞くことができないから大きな問題をかかえていると見なされ、コミュニケーション障害をもつと見なされている。「聞こえない子」という呼び名は、聞く能力の縦方向の差を示し、聞くことの重要性を示したと言えるのではないかな。

しかし、それが誤りであったと筆者は考える。なぜなら、コミュニケーション手段は音声言語のみではなく、そのほか利用可能な手段があるからである。そして、コミュニケーションには、生きるためのコミュニケーションと生活するためのコミュニケーションの2つあると考えられるからである。

以下に詳しく説明する。赤ん坊は生まれてすぐに生きるために泣く。あるいは体を動かして情報を伝える。次に多くの子どもが話し言葉を身につけてライブコミュニケーションをするようになる。これを「生きるためのライブコミュニケーション」と名付けよう。この根本的なライブコミュニケーション手段はその人が「自然に身につけることができる利用可能な手段」である。だから、聞こえる子どもが話し言葉を身につける時期に、聞こえない子どもは利用可能な手話を自然に身につけることができる。手話は聞こえない子どもが自然に身につける言語である。聞こえる子どもが音声で十分なライブコミュニケーションをするように、聞こえない子どもは手話で十分なライブコミュニケーションをする。手話で完璧なコミュニケーションを聞こえない人とすることができる。聞こえない子どもにとって、生活するためのコミュニケーションではなく、まず初めに必要なものは生きるためのコミュニケーションであろう。手話を使う人と完璧な「生きるためのライブコミュニケーション」を手話でできる聞こえない人はコミュニケーション障害がある人ではない。音声言語以外に利用可能なコミュニケーション手段として手話がある。

聞こえない子どもが大きくなって社会に出たときに多数派社会の音声言語が使えなかったら困るから、音声言語を習得しなければいけないという考えがまちがって

いた。2つのコミュニケーション（生まれてからすぐに生きるためのコミュニケーションとその後、社会生活するためのコミュニケーション）があって、生活するより生きるためのコミュニケーションが根本的な、まず第一に必要なコミュニケーションであると考えられるべきであった。

4・2 なぜ、まちがった考え方を継承しているか。

「聞こえない子」と呼んで、Aルート（音声言語の生活のためのコミュニケーション重視主義）を進むようになってしまうのはなぜか、Bルート（手話の生きるためのライブコミュニケーション重視主義）を進まないのはなぜか。

それは条件が違うからだと筆者は考える。この条件の場合はAルート、この条件の場合はBルートとあるはずだと考える。その条件とは何か。親が自分と子どもが同じ言語を使う同じ言語グループに所属すると考えるか、親が自分は日本語で子どもは手話と異なる言語を使う異なる言語グループに所属すると考えるかという条件ではないかな。

言い換えると、親が音声言語だけが言語と考えて手話は言語ではないと考えるか、言語とはコミュニケーション手段であるから、手話は言語であると考えられるかという条件ではないかな。

つまり、言語に対する考え方（コミュニケーションに対する考え方）が条件となる。コミュニケーション手段は音声言語のみであり、手話は言語ではないという考えが常識となると、Aルート（「聞こえない子」と呼んで聞こえないことをマイナスとして音声言語を使えるように努力させる）を進むようになる。そして、Aルートを進むのは、聞こえない子どもに対して、親が自分と見たところ同じなので（＝親子なので同じだ、聞く能力は同じようにあるはずだ）、目に見えない違いがあることを無視することになる。

一方、聞こえないという点で親と違っていると思っても、結局は人間として同じである。だから、人間としてコミュニケーション欲望があり、利用可能なコミュニケーション手段をもつはずであると考えれば、Bルートを選択することになるのではないだろうか。

「聞こえない子」と呼び名を何度も繰り返し使うことで、Aルートの考え方を継承している。そのくりかえしが「常識」を作ると筆者は考える。

以上の「Aルートの親の考え方」と「Bルートの親の考え方」を次の表にまとめておく。

	親子の共通点 (親子は同じ)	親子の相違点 (親子は違う)
Aルートの親の考え方	人間として音声言語を使う能力がある	音声言語を聞く能力差がある
Bルートの子の考え方	人間としてコミュニケーションの欲望がある	コミュニケーション手段 (= 言語) が違う

5. 結び 呼び名を変える

ここまで論じてきたことから、手話は聞こえない人にとって、生きるためのコミュニケーション手段であること、そして、人間はそれぞれ、利用可能な生きるためのコミュニケーション手段でコミュニケーションすることの2点を私たちは再認識しなければいけないと筆者は考える。

5・1 「聞こえない人」から「手話者」へ

「聞こえない人」という呼び名について、コミュニケーションの根本から考えてみると、この呼び名が不適切であることが納得できる。聞こえる人側がつけた呼び名は基準を与え、差(縦方向の違い)の分類をした。そして、差を表す呼び名が聞こえる人と聞こえない人の「統一」をめざした。一方、差ではなく、異(横方向の違い)を表す呼び名も聞こえない人側から示されていた。その呼び名は「統合」をめざしていると考えられる。統一をめざす差を表す呼び名は聞こえない人に劣等感や孤独感を与えて、聞こえない人は聞こえる人との間に上下関係を感じる。

なぜ、差を示す呼び名が使われてきたのか。それは、コミュニケーション手段を音声言語(言葉)のみで考えてきたために、人間のコミュニケーション媒体は音声言語(音声、文字)であって、手話は範囲外であるため、音声言語の縦方向の考え方しかなかったからであった。

呼び名には2種類ある。その差を表す vertical な呼び名を 異を表す horizontal な呼び名に変更することで対等な人間関係が生まれるはずである。

たとえば「聞こえない人」を「話せない人」と呼ぶと、呼び名が示す問題が変わってくる。「聞こえない人」と呼んで、聞こえないことを問題だとすると、聞こえるようにしようとする。聞くことのマイナス(欠陥)をできるだけ少なくしようとする。そして、聞こえる人との統一をめざす。

では、「話せない人」と呼んで、話せないことを問題

だとすると、音声言語が話せないで、その他のコミュニケーション手段を選ぶことになる。たとえば、手話や文字を使うことになる。そして、聞こえる人とも聞こえない人とも統合をめざす。

聞こえない人と対等な人間関係を築くために、呼び名を変えることを筆者は提言する。

5・2 支援という言葉 「杖的支援」、「見守り支援」

「社会は聞こえない子どもの親に支援するべきだ」と言ったとき、社会と聞こえない子どもの親の関係は上下関係になる。社会が弱者、かわいそう、苦勞している人である聞こえない子どもの親に give help する。

聞こえない子と呼んで、その子を支援すべきだと言ったとき、呼び名と同様に、支援という言葉が聞こえない子ども本人と対等な関係を生み出さない。

しかし、誰でも人間は助け合っている。支援し合っている。それなら、どんな支援をするべきなのか。どのようにすれば対等な関係を生み出すのか。筆者は手話環境をつくるのが聞こえない子どもと親に必要なことだと思う。そして、その手話環境を作るということは、self-help ではないだろうか。

筆者は支援について、以下のように考える。たとえば、歩くことが難しくなった老人の前に、杖をさしだすか、車いすを差し出すかの違いが self-help と give help の違いだと思う。杖を差し出すと、その老人は杖を使って自分で歩くことになる。車いすを差し出すということは、車いすにその老人を乗せて、誰かが後ろから押すというサポートを与えることになる。しかし、杖と車いすの違いは、車いすに乗ると、その老人は自分で歩けなくなるということだ。1人の人間である以上、「自分が自分で自分を」self-help し続けたいと思うのが人間の欲求ではないか。まずは self-help になることを手助けすべきではないか。つまり、「杖的支援」、あるいは「見守り支援」と名付けられるような支援が必要ではないか。

では、聞こえない子どもと親に手話環境を与えることは、杖を差し出すと同様でなければならない。ろう者コミュニティの紹介や、手話教室を開いて手話が身近なものになるようにするなど環境を与えて見守る支援によって、手話というライブコミュニケーション手段を通して人間関係が生まれる self-help になるのではないか。一方、手話を公用語にする、手話言語法を作るなどは車いすに近いサポートになるのではないかと考える。まず必要な支援は「杖的支援」である。

参考文献

- 1) Edward Burnett Tylor, "Researches into the Early History of Mankind and the Development of Civilisation", Murray, London, 1865.
- 2) Small, Anita R.: Teacher Research in a Bilingual/Bicultural School for Deaf Students, p.1, the Ontario Ministry of Education and Training, Canada, 1996,.
- 3) Harlan Lane, Richard C. Pillard, Ulf Hedberg: The People of the Eye, Oxford University Press, New York, 2011.
- 4) Rachel Mckee: People of the Eye: Stories from the Deaf World, Bridget Williams Books, New Zealand, 2001.
- 5) Michael Chorost: Rebuilt: My journey Back to the Hearing World, Houghton Mifflin Company, New York, 2005.
- 6) John Vickrey Van Cleve and Barry A. Crouch: A Place of Their Own, Gallaudet University Press, Washington, D.C., 1989.
- 7) Clifton F. Carbin: Deaf Heritage in Canada, A Canadian Cultural Society of the Deaf Project, Canada, 1996.

(受理 平成 26 年 3 月 19 日)